

OHSMS 構築ガイドライン

このガイドラインは弊社の IS014001 を含むコンサルティングや審査の経験をベースに、OHSAS18001 の弊社が好ましいと考える解釈を示したものである。したがって、本ガイドラインに準拠することは必須ではなく、組織の実態及び目標とする到達点を考慮してシステムを構築することとなります。

4.1 一般要求事項

組織（事業場）は、この OHSAS 規格の要求事項に従って、OH&S マネジメントシステムを確立し、維持し、継続的に改善し、どのようにしてこれらの要求事項を満たすかを決定しなければならない。組織は、その OH&S マネジメントシステムの適用範囲を定め、文書化しなければならない。

適用範囲を文書化するポイントは、対象となる組織、サイト、業務概要、部門等を明確にすることである。一般には、次により示すことができる。

- スコープ（例：〇〇〇の研究開発、製造及び販売）
- OHSMS の管理組織図
- サイトのレイアウト図

組織または事業所の中で適用を除外する場合は、その境界を明確にし、除外の理由も明らかにしておく必要がある。

4.2 OH&S 方針

トップマネジメントは、組織の OH&S 方針を定め、承認し、OH&S マネジメントシステムの定められた適用範囲の中で、OH&S 方針が次の事項を満たすことを確実にしなければならない。

方針には次の 3 点のコミットメントを含めることが必須要件である。トップが社会に向けて“誓約”するのであり、その重みを認識する必要がある。

- 負傷及び疾病の予防
- OH&S マネジメントと OH&S パフォーマンスにおける継続的改善
- 法的及びその他の要求事項の順守

また、方針は「組織の管理下で働くすべての人」に周知する必要があるが、これには従業員（嘱託、派遣、パートスタッフ等含む）だけではなく、構内の請負業者も含まれる。

OHS 方針の事例

労働安全衛生マネジメント方針

基本方針

弊社は従業員の健康と安全を経営の最重要課題と位置付け、
明るく快適な職場を作る

行動指針

当社は、〇〇の製造および販売の業において、基本方針に従い次のとおり行動する。

1. 労働災害と疾病の撲滅を図るために、OHS マネジメントシステムを構築し、継続的改善に努める。
2. 本方針を達成するための OHS 目標を定め定期的に見直しを図る。
3. 次の 2 点を重点課題とする。
 - はさまれ、巻き込まれ事故の防止の撲滅
 - 粉じん濃度の管理濃度 1/10 達成
4. 労働安全衛生法、消防法など関連する法規制および当社が同意するその他の要求事項を遵守する。
5. 全従業員にこの方針を徹底し、意識の向上を図る。

本方針は、外部へ公表する。

2009年□月□日

〇〇〇〇株式会社

代表取締役 △△ △△

4.3 計画

4.3.1 危険源の特定、リスクアセスメント及び管理策の決定

組織は、危険源の断続的特定、リスクアセスメント及び必要な管理手段の手順を確立し、実施し、維持しなければならない。

ISO14001における環境側面の特定と同様に OHS マネジメントシステムの最も重要な要素の一つであり、また、各組織が最も苦勞しているのがこの項目である。ISO14001の環境側面の特定・評価では、意味のない非効率な点数法が普及し、インプット、アウトプットの大きさのみに目を奪われ、難解な点数付けに時間を費やし、現地、現物を十分に確認していないケースが多かった。

残念なことに、全く同様な事態は OHSMS のリスクアセスメントでも起きようとしている。“リスク＝発生の可能性×結果の重大性”という点数付けに目を奪われがちであるが、もっとも大切なことは現場の作業を十分に観察することである。

ちなみに、OHSAS18001:1999のベースとなったBS 8800では、付属書D;リスクアセスメントにおいて、次のように警告している。

D.2.3 落とし穴及び解決策

官僚主義的な押し付けであると思いつながら実行された、計画上欠陥のあるリスクアセスメントは、時間の無駄であり、何も変えられない。さらには、リスクアセスメントの様式を埋めることそれ自体が目的になる場合、その組織は、細部において泥沼にはまりこむ場合がある。リスクアセスメントは、処置の一覧表を提供すべきであり、かつ管理手段を実行するための基礎を作るべきである。

潜在的にリスクアセスメントを行う能力を持つ人々は、自己満足に陥る場合がある。状況にあまりにも近すぎる場合、人は、その人の知る限り今まで誰も怪我をしていないことから、危険源を「見る」ことができないか、又はリスクを些細なものとして判断するという状況に陥る場合が多分にある。

新鮮な着眼点と十分な問題意識をもって、全員がリスクアセスメントに取り組むことを目指さなければならない。

.....

D.3.2 リスクアセスメントの要求事項

リスクについて厳密な数値計算を行うことは、一般に必要なない。リスクアセスメントに対し、定量化された、複雑な方法が要求されるのは、通常、失敗の結果が大惨事にいたる場合のみである。大きな危険源のある産業におけるリスクアセスメントは、他の職場で要求される手法に関連するが、ほとんどの組織においては、非常に単純な主観的方法が適当である。

D.6.1 許容可能なリスクか否かの決定

リスクを表現するために「中程度のリスク」とか「重大なリスク」とかの用語の代わりに、数字を利用することもできる。ただし、数字を使用したとしても、これらの見積もりが、より正確になるわけではない。

以降にリスクアセスメントの各プロセスを解説する。

1. 業務活動の分類及び危険源の特定

OHSAS18001において、多くの組織は「リスクの見積り」には非常に熱心で多くの時間を費やす。しかし、より重要なのは業務活動の分類、「危険源の特定」である。タスクアナリシスは、実際の作業を良く観察し、従事者の意見も聴取して分析することが重要である。

タスクアナリシスの例

プロセス活動	作業内容	従事者数	化学物質/特殊作業	作業方法	使用量	作業頻度	作業時間	技術的対策	保護具
洗浄工程	液交換	3	塩酸 36%	容器交換	200/日	1回/日	15分	局所排気装置	吸収缶式マスク、手袋、ゴーグル
	定常監視	3	塩酸 36%	監視	同上	常時	8時間	同上	安全メガネ
	ラック運搬	3	重量物	手運搬	15kg	1回/直	5分	-	-
	廃液廃棄	1	廃塩酸	ポリ容器による搬送	200/回	1回/3日	20分	台車利用	手袋、安全メガネ

2. リスクレベルの見積り

多くの日本の企業は点数法を採用している。その事例を次に示す。

リスク点数 = 発生の可能性 (A+B) × 結果の重大性 C

発生の可能性 A : 設備の安全性

危険の分類	評価点数		
	1	3	5
挟まれ、巻き込まれ	密閉構造	インターロックあり	カバーなし
墜落、転落	1.0m以下	1.0m以上で手すりあり	1.0m以上で手すりなし
火災	火気、危険物なし	危険物を引火点以下で使用	危険物を引火点以上で使用

以下続く

発生の可能性 B : 安全管理

管理の分類	評価点数		
	1	3	5
保護具	適正保護具を正しく管理	保護具あるも管理不適切	保護具なし
教育訓練	十分な教育訓練	教育訓練するも不十分	教育訓練未実施
火災	火気、危険物なし	危険物を引火点以下で使用	危険物を引火点以上で使用

以下続く

結果の重大性 C

危害の分類	評価点数		
	1	3	5
負傷の重大性	赤チン災害	不休災害	休業災害
疾病の重大性	通院不要の一時的疾病	短期的疾病	慢性疾病

以下続く

一見、合理的に見えるこれらの評価であるが、点数の重みに何ら根拠はない。全体を見通すと不整合が生じるケースも多く、そのための補正用の別ルール（例えば部門長の指定）を作り、辻褄を合わせているケースも散見される。多大な労力と時間を掛けるこの方法がベストとは言えないと考える。

前述の BS8800 が示すとおり単純な主観的方法で支障ない。BS8800 では次表を示している。なお、リスクレベルの見積りについては、厚生労働省も指針を出しており使いやすい。

表 D.1 簡便なリスクレベルの見積り

	軽微な危害	中程度の危害	重大な危害
あまり起こらない	些細なリスク	受容可能なリスク	中程度のリスク
起こりやすい	受容可能なリスク	中程度のリスク	重大なリスク
頻繁に起こる	中程度のリスク	重大なリスク	耐えられないリスク

3. リスクコントロール実行計画の作成

受容可能なリスクを除いてはリスクのコントロール策が必要になる。リスクレベルに対する措置と時間的猶予は BS8800 で次のように示されている。

(続く)